

## 第4回 浜松市未来デザイン会議 議事録

平成26年3月15日（土）2時00～3時52分

浜松市役所本館8階 全員協議会室

### 1 開 会

(事務局) ただいまから、第4回浜松市未来デザイン会議を開会します。会の進行は、会議のコーディネーター役をお願いしております、静岡文化芸術大学根本学部長にお願いします。

### 2 策定スケジュールについて

(根本学部長) みなさんこんにちは、コーディネーターということで会の運びをさせていただきます。今日もよろしくお願いします。それではお手元の次第をご覧ください。毎回スケジュールを出しています。間をおいて集まりますので、今我々はどこにいるのかを簡単に確認した上で、そして資料3、4というふうに検討を進めて参りたいと思います。ではスケジュールに関して事務局よりお願いします。

(事務局) (資料2説明)

(根本学部長) ありがとうございます。スケジュールに関して何か質問等はいかがでしょうか。よろしいですか。では一言だけ申し添えますと、年度の変わり目に近づいてきました。ご案内の通り次年度には基本構想本体を固めていくところに差し掛かっているということかと思えます。我々の責務ですが、忌憚のない、敢えて市民公募の委員に入らせていただいているというのは、規制の概念にとらわれず、ここは違うじゃないかという率直な意見があるかと思えますので、是非建設的にご協力いただければと思います。

### 3 市民意識調査最終報告について

(根本学部長) それでは、今日の検討の本題に入っていきたいと思います。次は市民意識調査の最終報告ということで資料3に基づきまして、市民意識調査と申しましてもいくつかチャンネルがあるので、新しい試みとしては、ビッグデータというものを使ったというものもあります。では事務局お願いします。

(事務局) (資料3説明)

(根本学部長) ありがとうございます。まず資料の位置付けとしては報告ということですので、ですからこの資料の中身について我々が深く議論するということではないのですが、今後の意見交換の中でこれを使っていきたいということになるかと思えます。何かこの資料について、この段階で何かコメント、ご質問等ありましたらいかがでしょうか。一つだけコメントさせていただきます。42ページで、ソーシャルメディアは便利な、あるいは他の手段にはない、優位性がある、その一方で手法としての限界もあるということで、データの属性情報が難しいということで、ここは議論の余地が残るのかなと思います。というのはビッグデータの定義が何かということもまだはっ

きりしていないのですが、むしろ今マーケティングとかで使われている状況は属性が、ピンポイントで手に入るというところがむしろ重要です。例えば活用例ですが何かイベントをやっている、イベントの最中にいちいちアンケートを取らなくても、リアルタイムでその反響を知ることができるというのが45ページにあります。ビッグデータの良いところはこれがピンポイントで分かることです。例えば道路が混雑するとか、子ども連れが不安だと言っているとする、その言っている人が誰で、何歳の人で、性別は何で、職業が何で年収がいくらでということがすべて見えてしまうというのがビッグデータの素晴らしいところなので、それが分かりませんということになると単なるインタビューやアンケートと一緒にしてしまうので、今後そういうところも議論の一つの論点になるかなと思ってコメントさせていただきました。余計なことを言ってすみません。あといかがでしょうか。

(酒井委員) 立派な報告書を作っていて、読み応えがあるなと思ったのですが、これはここでしか使わないものなのか、それとも他の会議とか、一般に公開されるものなのかを教えてください。

(事務局) もちろん資料としてはインターネット等で提供します。これを他で使うということではありません。

(根本学部長) 酒井委員はむしろ他で使う方が良いということでしょうか。

(酒井委員) 行政であまりやることがないと書かれているのですが、他の行政でやられたらどうでしょう。これだけ素晴らしいものなので使えないものかと思ったので聞きました。

(根本学部長) せっかくコストや時間をかけて、興味深いことが沢山出てきていると思うので、おそらく個人情報はどうということはないと思いますので、是非庁内でも応用していただくのが良いかと思います。あといかがでしょうか。ではまた後で気が付いたら発言していただいて結構ですので、次へ行ってよろしいですか。

#### 4 未来ビジョン（基本構想）修正案について

(根本学部長) では基本構想の修正案についてということです。前回、前々回と、そしてその間にメンバーだけの全員協議会のような意見交換会も含めてお手元の冊子の資料4となっている浜松市未来ビジョン（案）となっています。これは事務局から説明していただきますが、1ダースの未来と書いてあって、これは我々の議論したのと違うのではないか、あるいは提案の内容としてこれは追加すべきだった、という意見が前回、前々回とあって、そのあとも事務局に色々お寄せいただいたと聞いています。それをもとに手直しを行い、今回の資料となっていると聞いています。では事務局お願いします。

(事務局) (資料4説明)

(根本学部長) ありがとうございます。一応これまでの議論を入れ込んで言葉遣いなど

修正していただいておりますが、まだこれで決定稿ということではありません。今回の修正点を踏まえて、またこれまでの皆さんの経験の中から追加的に、あるいはむしろ違う表現にした方が良いのではないかと、など時間の許す限り詰めていきたいと思っております。いかがでしょうか。

(村田亜委員)

2ページの市民協働の部分で、第2回の会議だったと思うのですが、その時も市民協働について話が出たと思うのですが、私のイメージとしては、市民協働というのは市民と行政や企業とかが枠組みを超えて、立場を乗り越えて課題に取り組んでいくというイメージがあるのですが、この文章を読んだ時に、例えば私のできること、参加してみようと思えるかなというのと、あと例えば「生活基盤については、公共インフラが最適化され」という段落なのですが、こちらはコンパクトシティとかぶるような気がして、この三つ「創造都市、市民協働、ひとづくり」というものがその下にくる柱のおおもとになる三つの部分だと思うので、それが柱の中に生きてくれば良いと思うのですが、そういう意味で市民協働というところに疑問を感じました。意見をいただけたらと思っております。

(根本学部長)

どなたか関連して何かありませんか。私から一つコメントしますと、協働というのを使うようになったのはここ10年ぐらいで、普及しました。厳密に辞書に載るように確定はしてないのですが、単に仲良しグループとかで一緒にやりましょうということではなく、協働とっているのは、主体性を持って参加することだと思います。ある意味で責任もある。ですから勿論ボランティアでやるというのは時間や労力でできるものをやるわけですが、地域や都市を経営するという観点からは、お金は出せないけれど労働力なら出せますとか、仕事が忙しいからなかなか活動には参加できないけれど寄付金なら出せます、とか、出せるものを出してそれを経営資源として集めて、都市や地域を経営していきましょう、というのが協働だと、こういう一つの考え方があります。ですから書き方としては、市民の皆さんの持てる能力であったり、資源だったり、自分として提供できるものを提供する。それを単に出すからお任せというのではなく、主体的にその活動に参画できる。それが同等の立場でということの意味だと思うのです。そういう記述ができないかなと今のご質問を聞いて思いました。

(河原委員)

随分よくまとまってきたと思います。3つ質問をしてよろしいでしょうか。例えば12項目があるのですが、これをひらがなと漢字を並列してあるというのは、私が聞き漏らしたのかどうか分からないのですが、どうということかな、これから全部このように並列していくのか。例えば内容をみていくと、漢字の方の「創る」というのが文章に入っていたり、ひらがなの方があったり、例えば働くとか育むとかばらばらになっていますので、それも含めて並列する意味というのを教えてください。それから2ページの下から5行目ですが、「ひとを育て、モノをつくり、ニーズに応じたサービス」これを（こと）と置き換えていくということ。サービスがことなのか。さらに3ページの方にも上から4行目に「これが欲しかった」と思わせる‘こと’があります。このことの定義がその時々で変わってくるのか、サービスというのをことと言うのか、その関連性が分かりにくいのです。もう一つは9ページに、防災と防犯、地域の支え合い、というのがありますが、例えばコンビニエンスストアなどの店舗が防災防犯の相談所となり、ということで、これらの店舗をコミュニティの核とするという、こ

これはコンビニが沢山あるので、とても良いことだと思いますが、コンビニの協力を余程得ないといけないかなということと、最近では、ここにコンビニがあったなと思うと、次に行くとなんかありますし、それが激しいので、ここに疑問を感じました。もう少し何か良い方法、コンビニを利用するのならこうだということがあったら良いのかな、と心配になりました。全体を見るとまだまだ文章の加除修正をしなければいけない所がかなりありました。それは細かいことなので、事務局と話したいのですが、2重に言葉が入っていると、言葉自体が分からないところがかなりありますので、直接意見を言って善処できる場所は加除修正をしていただきたいと思います。

(根本学部長)      ありがとうございます。最後におっしゃっていただいたのはおそらく全員同じ思いになるのではないかと思います。このテーブルはこのテーブルで言うべきことをきちんと意見表明をするということと、あと必要に応じてこれまでやってきたようにまた意見交換会とか、個別に事務局とやりとりをする機会を持つことは可能だと思いますので、このテーブルが終わったら終わりだよということではないということを確認しておきたいと思います。その上で3点ご質問をいただきましたので、まずひらがなと漢字の件、これについて事務局から何かありますか。

(事務局)            これは遊び心というか、辞書にひらがなで書いてあって漢字があるということイメージして。確かにこれは、これでなければならないということではありません、見せ方としてこのようにやってみたということです。

(根本学部長)      おそらく見出しを作ったということ。むしろご指摘いただいたのは、それはそれとして、記述の中でひらがなと漢字が混ざっていますが、ご質問の趣旨は、単に見出しという意味で、辞書の見出しのように同じ内容のものが重ねて書いてあるのか、ひらがなで書く時と漢字で書く時に使い分けられているのかということだと思いますが、その辺はどうでしょう。

(事務局)            この場合は同じものと考えています。

(根本学部長)      見出しということですか。ここはちょっと詰めましょう。見せる、プレゼンテーションとして目次のところは辞書の見出しのようなことをしていますが、文章の中は必ずしもきちんと整理されていないようです。それから、2点目は「こと」ですが、2ページ目にあって、これは実はマーケティングとかでよく使う言葉づかいで、業界用語になっていて、ものに対してことと言っている。ここでは都市経営のようなことをイメージしていますので、「ひと・もの・こと」が回っていくという意味で使っていますので、ほぼサービスの意味です。それ以外のところは「こと」というのはそういう意味は付けていないと思いますので、この両側にペケペケと付いている「こと」がイベントとかサービスの意味で使っていて、それ以外のこれが付いていない「こと」はそうでないと思います。その上で「こと」をどこまで使うのかということですよ。

(事務局)            確かに場所によって違うようであればそれも統一すべきだと思います。ただ物理的な意味ではなく「こと」だと思っています。

(根本学部長) カッコのついているのが特別な意味で使っていて、それ以外のところはそうではないということです。

(河原委員) では3ページの4行目の「こと」というのも「もの」と並べた「こと」でいいのですね。

(根本学部長) ハードに対するソフトの意味で使っているということです。  
それから最後の点ですが、9ページですが、改めて今ご意見をいただいて、コミュニティの核という言葉が言い過ぎかなという気が確かにしてきましたね。コンビニというのはモノを売るだけではなく、防犯とか、色々な自治体によっては行政手続、住民票をプリントアウトするような端末があったりしますが、おっしゃるように基本的には営利企業としてやっていますからどんどん更新されていきますね。だからコミュニティの核とまで言うてしまうと持続性にクエスチョンが付くかも知れないですね。ここから先は私の一委員としての個人的な意見ですが、ずっと兵庫にいたものですから、阪神淡路大震災のあと、地域のコミュニティの核をどうするのか、兵庫県の場合は少子化で学校の教室が余ってきていますので、地元の小学校ないし中学校にコミュニティの核を作る事業をやっています。それから地元の診療所、これは行政がやるのではなく、医師会と社会福祉協議会と市民団体が、今は医療費が膨大なのでいつまでも入院しているのではなく、地域医療で支えましようとなっています。ですから地域の診療所なども地域のコミュニティの核のようになっていて、だからコンビニに限定しない方が良いでしょう。幾つか可能性があります。小中学校の空き教室、農協の設備も余っていると思います。そのため何でもかんでもコンビニがやるというのは書きすぎたなと思います。他にいかがでしょうか。

(松本委員) 7ページです。—ほどよい田舎暮らしができる「中山間地域」—に「一方で、自然豊かな中山間地域は、命の源である水を生み出す、欠かすことのできない地域であり」、その次に「その価値が見直されています。」というのがありますが、ここをもう少し一歩踏み込んで、「その価値と環境面の大切さが認識されています」と一歩踏み込んで書きたいなと思います。それからこの文章の後に、浜松の市街地、まちなかは天竜川の下流にあたるわけですが、それから浜松の中山間地域、これは上流にあたるわけですが、天竜川で結ばれている。この結びつきが私はとても大事だと思っています。その後の文章に例えばこんな表現を入れてもらえたら良いなというのが、「浜松は水を通じて上流は下流を思い、下流は上流に感謝する気持ちが育まれています。」というような文章を入れて、浜松の上流と下流が離れた地域ではなくて、一緒に協力して、関連し合っている市だということを強調していただけたらなと思います。以上です。

(根本学部長) 今の表現を盛り込めるなら盛り込んでいただければと思います。関連して私も7ページを見て思ったのですが、これは水のことに触れて、それから観光という価値にも触れています。イベント的なことばかりではなく、林業なら林業が本業だという話があり、それを遡って考えれば7ページの記述も上流と下流、中流もあります、その関連性というのは水で繋がっています。イベントとか人の交流があるだけでなく、林業とか木材の需要

と供給であるとか、食材の需要と供給であるとか、それから下流で生ごみや残飯から作ったコンポストが農地に還元されるとか、そういう色んな循環ができあがっていると思うのです、水だけではなくて。だからここも今言ったように、上流と下流が繋がっているよという精神的な繋がり、理念的なものから始まって、非常に現実的な間伐材が下流でも使えるとか、そういうことも触れたら良いかなと思いました。すみません、私ばかり喋って。皆さん続けてどうぞ。いかがでしょうか。

(杉山委員)

先ほど河原さんが一つ目の質問でおっしゃっていた目次のところでひらがなと漢字があるということですが、前々回の会議の時に私が資料としてキーワードがあった方が良いという指摘を反映していただいたのかなと思うのですが、キーワードを一個とくくってしまうと、ひらがなとしての役割しか果たさないというか、文章をこちら側でくくってしまうというのが問題で、例えばエネルギーだったら新エネルギーとか省エネとか再生可能エネルギーというような色々なキーワードを含んだ文章ですよ、ということ羅列させておいて、新エネルギーを調べたい人も省エネを調べたい人も、どこから入ってきて、その文章にたどり着けるような目次にしていただきたいという意見だったので、そこがどうかと思います。

(根本学部長)

ありがとうございます。目次のところですね。例えば「つくる」ときて浜松の産業としか書いていないが、ご提案の主旨はもっとキーワードが沢山出てくる。それがインデックス、目次機能を果たしてどこを読んだら良いかということにつながっていく。とても良いご提案だと思います。あとはどうでしょうか。

(外山委員)

今のことに付随するアイデアですが、目次を見ると、この会議に出席していてもどこに何が書いてあるのか、文字としてごちゃごちゃしているなという印象を受けます。キャッチコピーを、そこそこ大きい文字にしてあるのですが、そもそも目次を見る方は、例えば「つくる」で産業・観光と書いてあって、それを頼りに行くと思います。目次の時点ではこのキャッチコピーの文字の大きさを逆にして、あと全部に「浜松の」が付いていますが浜松は大前提なので、浜松を全部取って、「産業・観光・ものづくり」とかいうキーワードを入れてはいかがでしょうか。「見たこともない」感動をつくる、というのを入れるのなら、こちらを小さくて良いと思います。もう2つですが、3ページの先ほどの「こと」と「もの」ですが、上から3行目あたりに「機能からデザイン、サービスに至るまで見たこともないと驚かせるもの、また、これが欲しかったと思わせることがあります」とありますが、これは、「こと」と「もの」を入れ替えても成立する文章だと思います。見たこともない、これが欲しかったと驚かせるものことで良いかと思います。あと、最後に一番下の文章で、世界に発信する工夫がなされていますというのがちょっと弱いかなと思っていて、工夫をしたけど発信できていないということもあり得るので、その発信力は地方都市でトップレベルですとか、その発信力は地方都市で一番ですというような強い文章にしても良いかなと思います。以上です。

(根本学部長)

はいありがとうございます。

(村田昌委員)

3の浜松のエネルギーのところ。上から2行目のところに、「ほとん

どの個人住宅や集合住宅には」とあって、あとその下の段の「エネルギーの自給自足」というところの2行目にも「個人宅だけでなく、民間企業や地域コミュニティにおいても」とありますが、地域コミュニティが何に相当するか分かりませんが、個人住宅も集合住宅も民間企業も個人の資産だったり、利用者の予算だったり、投資することとなると思うのですが、では市としてはどういう投資をするのかという、民間の投資だけが書かれているようにもとれるなと思いました。たまたま知り合いから教えていただいて、宝塚市が再生可能エネルギーの利用推進に関する基本条例というパブコメを出していて、それはかなり細かいのですが、その中には市民の責務、事業者の責務、市の責務が書かれています。市の責務の中には、市は再生可能エネルギーの利用推進を図る為、公共施設やその他公用財産において積極的な再生可能エネルギーの生産を行うものとする、ということが書かれています。浜松市の環境基本計画というの、この前別の委員会で見せていただいたのですが、この中にも学校施設ですとか公共施設、環境教育の場の充実も書かれています。市としてどういうところに投資していくかを出した方が良いと思います。もちろん先ほどの説明でも市にできることには限界があるというのはその通りだと思います。限界があるから全部やめるとか、限界を無視して全部やれということではなくて、その中間で例えば象徴的なことでお手本を示すということでも良いと思います。直近の話として、中部中学校が話題になっていますが、ではあの学校が本当にここに書かれているようなお手本になるような学校を計画されているのか気になるころではあります。今の話と30年後をごっちゃにはいけないのしょうけれども、何か市として、全部やる全部やめるではなく象徴的なことだけでも投資していくということができれば良いな、そういうニュアンスが含まれると良いなと思いました。

(根本学部長)

ありがとうございます。2点目のエネルギーですが、これも景観審議会でお手伝いして案件が上がってきたのですが、市は、既存の小学校に太陽パネルの設置をやっておられますよね。だから記述として公的施設はもとより、とか何かそういうことを一つ入れた方が良いでしょう。公共というと狭くなる、公的施設といえば指定管理者も全部入ってきますから。「公的施設はもとより、個人や企業も」というのは必要だと思います。あといかがでしょうか。

(榊原委員)

見栄えというか書き方だけですが、4ページです。冒頭に表題というか、面白いなと思ったのは算数みたいに×(かける)、=(イコール)となっているんですが、その下が×(モノづくり産業)×(ICT)だったり、その下もそうなんですが、冒頭に×があるのが何にかかっているのか、はたまた、(ばつ)なのかと思ってしまう。単純にものづくり産業×ICTだったら最初の×はいらないと思った次第です。

(根本学部長)

事務局いかがですか。

(事務局)

自然の恵みに×(かける)ということで、スパイスがここに書いてあるものづくり産業とかICTのつもりでしたが、伝わらなかったかも知れません。

(根本学部長)

では今の指摘を受けて、話が伝わるように変えましょう。

(松尾委員)

先ほどのエネルギーのところですが、バイオマス発電のこととか生ごみのことが真ん中あたりに書いてあります。バイオマスの使い方という意味で、ほぼ100%発電に消費しています。この言葉自体ちょっとおかしいと思うのですが、それは別として、生ごみが100%発電で良いのかということもあると思います。先ほど出たように肥料として還元するとか、他の使い方などが当然出てくると思いますので、それをここに言い切ってしまうのはどうかなというのがあります。もし書くとしたら、発電に消費してはではなく、活用していますかなと思います。以上です。

(酒井委員)

14ページの「むすぶ」なんですけど、「もはや遠距離は、二人の妨げではない。」とあって、二人もひっかかるころなのですが、遠距離はとあって、ICT、情報通信技術だと思うのですが、書いてある内容は通信技術だけしか書いていなくて、情報が抜けているように思えたので、例えば「学び方にICT」と書いてあって、児童・生徒は、それぞれインターネット端末を所有しています。」と書いていますが、今学校で言われているICTというのは電子黒板みたいなものがあって、いわゆる、これまでとは違った授業ができますよ、例えば、ミツバチの生態を図鑑で見のではなくて、触ったり、動画でとか、もっと言えば、3D技術みたいなものが発達してくれば、それがAR仮想現実みたいなものでできあがってくる、というのが情報という部分だと思います。直接、遠くのものが見えるというのは素晴らしいことですが、情報技術の部分が抜け去ってしまっているのではないのでしょうか。特に医療技術においても、今まででしたら胃カメラを飲まなければならなかったものが、仮想内視鏡とかと言われるもので、CGですごく細かく撮ることによって、腸の中身が、それが画像再構成で見えるようになってきたというような、新しい情報という主旨の記載があると良いと思います。観光客にICTというのも、ビーコンなんかを使ったりとか、さっき言ったARを使ったりとか、携帯電話を持っていてその近くを通ったら、こんな新しいものができるだとか、クーポンなんか落ちてきて、それを見せると安く物が買えたりとか、そういうスポットスポットに応じたコマースみたいなものが観光客に直接情報としてポンといくことができるのですごいということが書かれている方がふさわしいと考えます。遠距離というよりは、その時その時の「こと」に対して直接対応できるような情報技術があるよという書き方でないともずいぶんかなと思いました。

(根本学部長)

おっしゃるように14ページの、特にこの「学び方」というところを見ると、一人ひとりが端末を持っているというところに書かれていますよね。おそらく情報化というのは、コミュニケーションという部分と、システムそしてインフラという両方の部分があるので、コミュニケーションとしては端末を使って、そして社会的には変な使い方をしないリテラシーを、という話になります。システムとして、インフラとしてというのを書いておかないと。端末さえ持っていれば全部ということじゃないと思います。

(前田委員)

大体おおまかなところが決まってきた中で申し訳ないのですが、私もエネルギーに関してひとこと言わせていただきたいのですが、前から全体の文章を読んでいてすっきりしない部分があるなと思ったのですが、バイオマスや光や風力を使った、再生可能エネルギーを使って浜松



市は電力を再生していきますよという記述があると思うのですが、ここで省エネが謳われている、そして他のところで少子化という問題も取り上げられていて、エネルギーの消費量というのは減っていくと思うのですが、減っていくのに対してバイオマスを使って更にエネルギーを生産していこうというふうに捉えられるのではないかと思います。エネルギーが十分なところに更に再生可能エネルギーを使ってエネルギーを生み出すというのは、冒頭にある「未来に無駄なし。」というところに無駄が出てくると思います。自分としては文面に既存のエネルギーの生産と再生可能エネルギーの置き換えみたいな文言が織り込まれた方が、説得力があるのかなと思います。どこか最後のあたりに、環境に影響を与える既存のエネルギー生産からの脱却を浜松市は目指していきますというようなことが入った方が良くと思います。

(根本学部長)           ありがとうございます。

(村田亜委員)           多文化共生のところですが、日本人と外国人の文化共生というのがメインに書かれていると思うのですが、私自身は、例えばここにいる学生さんと私とか、私と先輩の方がたというのも、もう文化や価値観が日本人の中でも違うと思っています。例えば子育て中のお母さんの悩みだと、子どものことに対して年配の方からああでもないこうでもないと言われて、それが悲しいとか傷つくという言葉をよく聞いたりとか、外食に出かける時も子連れでは場所が限られたりします。子連れ専用のカフェにしか行けないとか、今結構分断されているというか、以前、根本コーディネーターが勉強会の時に20世紀は分業の時代だとおっしゃっていたのですが、日本人の中でもそういう年齢、仕事、男女などの区切りや分業がされているので、30年後の未来としては同じ日本人の中で価値観の違う者同士も一緒にコミュニティを作っていく、一緒に共生していくという文言が入っても良いのかなと思います。

(根本学部長)           ありがとうございます。ここを改めて見て、おっしゃるように外国人市民と日本人というのが大きく前面に出ていますが、ご指摘の通りで、我々もそういう議論をしてきたと思いますね。日本語で言うと包摂（ほうせつ）、包み込むという意味ですが、違いを認めた上で社会にみんなで主体的に参加して認め合って社会を作っていく、これは外国人に限らず障がいを持った方とか、あるいは年齢が若いとか年を取っているとか、あるいは単身であるとか子どもがいっぱいいるとかいないとか、あるいは最近ではゲイとか、男女の性別であるとか、そういうことも含めてインクルーシブな社会ということになるだろうと思います。これは実は全体の1ページに書いてある「未来へ輝く創造都市」という、この創造都市の理念に深く結びついています。クリエイティブな価値を生み出していける都市というのはインクルーシブな都市なのだ、誰かを排除するような都市ではなくて、あらゆる市民が持てる能力を主体的に発揮できる環境のある都市なのだという議論がありますから、これは是非充実して書いていきたいと思いません。

(松本委員)           サブタイトルを入れていただいたのは非常に良いのですが、サブタイトルの付け方は非常に難しいと思います。サブタイトルというのは文章全体を読まなくても大体の書いてある内容が分かるというので、非常に難しい

と思います。例えばいくつかもう一度見直す必要があると思います。私が気づいたのは10ページ、「はぐくむ」のところで、「地域社会が出生率は上向き」とありますが、これだけだと良く分からない。中を読んでいくと、みんなでというのが出てくるのでここは「地域社会がみんなで」、とあればみんなで作っていくのだなと分かる。それから隣のページも細かいことですが、「長寿を喜べる世の中へ」となっていますが、これは喜ぶのはおそらく社会全体が喜ぶことだと思います。年取った方が元気でいつまでも働ける、そういうことだとすると、「長寿が喜ばれる世の中へ」とすると、社会全体が今までと違って、若者だけでなく老人に期待しているのだなと分かってくる。他にもあると思いますが、サブタイトルは非常に大事であって、読む前にどういう内容が書いてあるか、というのと同時に読んだ後にもう一回見ると、まとめというか、こういうことなのだということが分かるようなタイトルの付け方が良いのではないかと思います。

(根本学部長)

サブタイトルはまだ工夫の余地がありますが、さはさりながら、ここにあまり盛り込んでしまうと簡潔な文章にならなくなるので、先ほど杉山委員からご提案があったキーワードと組み合わせ、簡潔な文章だけでは、全体を言い表し切れなかったら、プレゼンテーションのやり方としては、キーワードを並べろとか、それと両方でできるかなと思いましたので、工夫をしていくということだと思います。もしよろしければ私の方から一つ論点をお示ししたいと思うのですが、それは文化ということです。文芸大だから言っている訳ではありません。冒頭、全体のビジョンの包括的な将来像の一番重要なのが1ページにある「未来へ輝く創造都市」なんです。ここには文化のことが書かれているのですが、改めて読み返してみたら、他の部分では明示的にあまり文化、文化と言っていない。文化というのは非常に多様性のある言葉で、非常に広い、深い意味もある一方で、文化・芸術という意味の歌舞音曲というところとちょっと言い過ぎかも知れませんが、そういう部分と両方ありますね。改めて浜松が目指すビジョンとしては、やはりエンターテインメント、楽しい、面白いだけではなくて、新しい産業であるとか、新しい社会ができあがっていく根本的なところが文化だろうという思いがあります。具体的にいくつか論点を提示してみたいと思うのですが、ということで12の未来に13番目に文化を付ける必要はないと思います。この中に入れ込んでいくというやり方があると思います。そういう意味でいうと3ページの「つくる」というところが、やはり文化が大事だと、ライフスタイルの最後のくだりで発信力がトップレベルだ、何を発信するのかと言ったら、浜松というのは住んで良い所だ、そして色々なビジネスができる所だということを発信するのですよね。それから例えば、本田宗一郎がバイクを作りました、この本田おじさんをつかまえて、「あなたどうしてバイクを作ったのですか」と聞いたら、「面白いから作ったんだよ」と言う訳です。最初から儲けようというのではない。そういう意味で言うと、オンリーワン技術、イノベーションというのは技術、技術と言っていますが、まさに必要は発明の母で、こんなことがあったら面白いよね、こんなことがあったら素晴らしいよねというのが実を結んで、イノベーションになっていると思いますので、この「つくる」というところ、そういうあったらいいね、できたらいいねが実現できる、そういう経済的、社会的、文化的環境を持った都市になるのだというのを発信できたらいいなと思いましたのが一つです。それから、2点目は8ページで、これは先ほど委員の皆さんからお話しが出ました。認め合うと

ということが文化を作っていくにはとても大事なので、先ほどおっしゃった外国人に限らず、創造性を発揮できるような社会環境、文化がはぐくむのだということが書かれればいいのかと思います。それから9ページ、文化から離れてしまって申し訳ないのですが、防潮堤は、今後かなり議論が出てくる可能性もあるかなと思っていて、あまり建設的な意見でなくて申し訳ないのですが、1000年堤と書いてありますが、鉄筋コンクリートの寿命が大体80年なので1000年持ちません。3. 11で東北でも最初は16メートルの防潮堤だったのですが次々見直して今どんどん下げてきています。むしろ防潮堤を作るより、避難路が先ではないかとか、まだ結論が出ていないので議論を深めていかなければいけないので、ここは論点が残るかも知れないということだけコメントさせていただければと思います。文化の話に戻りますけど、12ページの働く、チャレンジする、ここの部分もやはり、こういうことが実現できたらいいね、こういう活躍ができればいいねということが叶うのだと、そのために自己実現や生涯学習というのが単に自分の心が豊かになるのではなくて、それがビジネスとなり、サービスとなり、地域を支えていく。特に先ほど言いました包摂的社会というのは、「あなたもう年取ったからリタイアしなさい」ということではなくて、その人の体力、気力に応じて活躍の場があるということだと思います。最後は14ページで結ぶのところですが、ここはやはりICT技術の活躍の分野として、是非単身世帯で豊かに暮らしていけるというのを追加できないかなと思うのと、もう一つは、レンタル自転車みたいな、社会の公共交通インフラというものが、このICTで随分豊かになるじゃないかなという期待があります。自転車に限らず赤電とかバスとか全部含めてです。単身世帯というのは20年後にはもう間違いなく3分の1以上が高齢単身世帯になっていきます。それが社会の中で孤立したりしないように、かつ自尊心を持って生きていけるような、というのがこのICT技術が大いにサポートできるのではないかと期待しますので、その辺が追加できればと思いました。どうでしょうか、何か文化ということでご提案がいただけないかと思ったのですが、文化に限りません、まだ言い足りないところがあったらおっしゃってください。

(松尾委員)

今のお話を聞いていて、全体を通した時に、浜松の代表的な文化とっていい音楽に対して少ないというか、ほとんど触れられてないと思っていて、是非もう少し入れ込まないとまずいのではないかなと感じました。

(根本学部長)

ありがとうございます。そうですね、創造都市ネットワークというユネスコのそういった都市と都市の交流にも浜松は手を挙げてきているところです。楽器産業それから音楽コンクールであるとか、浜松まつりのあのラップであるとか、今市民主導でやっているフェスティバルとか、これは30年後大いに花開いているというビジョンは描けると思います。

(須藤委員)

文化との関連というところじつげになるかも知れないのですが、文化度の高さというのは世界的にも女性の活用がどの程度進んでいるかということで計られる場合も多いと思うのですが、この中で働くという項目の中で女性の活躍について語られるべきかと思います。子育てママについては出ているのですが、高齢者が出ており、障がい者が出ており、女性という言葉が出てきていないので、もっと女性が生き生きと活躍できる場を提供してもらいたいという、そういう言葉を一つ入れていただきたいのと、も

う一つ、はぐくむのところで、最後「世界に誇る浜松育ち」ですけれども、これはとても楽しい学校生活が書かれているのですが、学校は誰もが平等に学ぶ機会を得られる場所であるので、こういう楽しい場面ができればいいなと思いますが、これを見ていて、学校教育がこれだけの選択肢のある教育の場を提供できるのかなというのを多少不安に感じたりしています。今ちょっと問題になっているのは、子どもたちの学力の差です。できる子はとてもできます。できる子たちにも学ぶ楽しさをどんどん発揮して、高いレベルに向かって進んで行ってもらいたいと思うのですが、本当に基礎的な学力が身につけていない子どもたちというのも現実に沢山いるのが現状です。ですから学びを選択できるというのは良いのですが、学校では学力を最低限保障する場であるということも一言付け加えておいていただくと良いかなと思います。学校の負担は増えると思いますが。

(根本学部長) 女性が活躍できるのは当然の世の中になっています。しかも活躍できるための経済的社会的環境がちゃんと整っている社会になっているはずだということとは異論がないところだと思います。

(須藤委員) と思いますが、一言それを入れて、それが当然であると。何故ならば、将来はそうであると思っていらっしゃると思いますが、今現在がそうではないというのが現状ですので、現状と変わるところがあるのであればそれを入れておいていただきたいと思います。

(根本学部長) ありがとうございます。そろそろ時間的なこともありますし、残りの資料もありますので、ここでこのビジョンの案についての意見を一旦まとめたいと思います。まだ言い足りない、あるいは足りないところもあるということです。前回と同様に気が付いたことは是非事務局にご指摘をいただければと思います。では全体をお聞きになって市長さん何かありますか。

(鈴木市長) ありがとうございます。だいぶ色々な要素がまとまりつつあるなという感があります。今日も議論を聞きながら30年前を少し思い起こしていたのですけれども、30年前から今あまり変わっていないという不変な部分と、大きく変わったところと色々あったなと思うのですが、特に様々な技術の発達でライフスタイルや働き方まで大きく変わってきたところがこの30年間でかなりあったなと思います。30年前を思い返してみると、まだワープロが出た頃なのですね。ワープロもキーボードじゃなくて最初タッチペンだったのですね。文字を拾うというのがそんな時代で、勿論パソコンはありません。やっとオフコンという言葉が流行り始めた頃でしたし、携帯電話も車載の大きな電話がある頃でしたし、まだファクシミリもそんなに普及していない。そうやって考えてみると驚くべき進歩だなと思います。端的に言えるのは、私は30年前に孫正義さんに会ったのですけど、当時は倉庫の一角を事務所にして、まだ創業したてで、コンピュータのソフトの間屋みたいのを始めていたのですね。それが30年ほど前の話でして、今のソフトバンクの隆盛をみますと隔世の感があるなというふうに思うので、30年というのは、たかが30年されど30年だなという気がいたしました。そういう意味では、これからの30年に向けまして超高齢社会であったり、更なる技術振興であったりとか、様々な要素が想定できる中で、こうしたい、こういう世の中に、あるいはこういう浜松になって

ほしい、というもう少し想像力を更に働かせていただきまして、もっとこれがブラッシュアップされると良いなという気がいたしました。引き続きよろしくお願いいたしますと思います。

## 5 基本計画の構成について

(根本学部長) それでは再び次第をごらんください。ここまでがいわゆるビジョンです。それを12の未来ということで議論してきたわけです。次年度に向けまして、これを一つ一つの具体的な、行政だけではないのですが、行政施策だとか、あるいは地域の政策に繋げていくために基本計画という形でブレイクダウンしていく訳ですね。今回は事務局の方で今後これを具体的な施策にどう繋げていくかという、基本計画をどのような形でまとめていきましょうか、というたたき台のようなものがございます。これを皆さんとまた議論してみたいと思います。では事務局お願いします。

(事務局) (資料5,6説明)

(根本学部長) ありがとうございます。そういうことなので今日は今後このビジョンをより具体的に記述していくための枠組みの案が資料として提示されたということです。改めて整理しますと、ほぼピラミッドなのですね。完全にピラミッドで良いかというところでもないのですが、ビジョンが一番上にあって基本構想の柱立てがあって、その下に基本計画がある。基本計画は5年10年15年というふうにローリングで展開していくということになります。今日はまずこの全体の構成の話と、更に中身の話はビジョンそのものがまだ訂正が入りますから来月以降ということになりますけど、現段階で何かお気づきの点とかご提案があればこの場でご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

(村田亜委員) 質問ですが、この基本計画に対して私たち委員はどのように関わっていくとか、何か作成されたものに対して意見を出していくのか、それとも私たちが意見を出したことを元に庁内で考えてくださるのか、結構細かい文脈の計画となると、きっと課の方のここにいらっしゃる方とかのコンセンサスとかがあると思うんですけど、委員としてどこまで関われるのかを教えてくださいたいと思います。

(事務局) 確かに事業の中身になりますと、委員の全ての皆様が中々分かるものではないかとは思いますが。ただやはり細かく基本計画の中でも理想の30年後の姿を定めます。皆さんのした議論と、これは方向が違うのではないとか、具体的なものとしてこれはもっとこうの方が良いのではないかという意見というのは、より上のレベルでは話し合いのしようがあると思いますので、是非基本計画につきましても、中身の質問も含めた提案を出していただきたいと考えています。

(村田亜委員) 分野別の組織の中で、例えば子ども家庭部と学校教育部が一緒になっていると思うのですが、私が聞いているところだと、学童保育なんかは、今は子ども家庭部という部署になるのですが、実際、学校については学校教育部という関わりがあると思います。そうすると、例えば学校の施設を使っていると怪我をしてはいけなから外で遊んではいけない、という学

童があつたりとかして、関わっている課によってできない所とか入れない所がもしかしたらあるのかなというのを感じたので、策定するにあたり気になっています。

(根本学部長)

コーディネーターを仰せつかっている立場から、半分お願いで半分は論点整理ということでお話ししたいと思いますが、このテーブルは非常に自由闊達なテーブルであり続けることが大事だと思います。さはさりながら、やはりできることとできないことに最終的にはなっていくと思います。どちらが先かということでは明確にならないのですが、半分お願いと申しましたのは、どうかこのテーブルの発言は自由な発言として行政には受け取っていただきたいというのがお願いです。一方で我々は選挙で選ばれた議員でも何でもありません。ですから発言の全てが実現できる保証は全くありません。ですから例え取り上げられないということになったとしても、それを承知の上で、我々は積極的な発言をしていくべきではないかと思えます。そういう意味ではキャッチボールをして、行政としてはこういうことを考えているがどうであろうか、いやそれは壁を取り払ってやるべきではないかという議論はするべきだと思います。

(田中委員)

資料5の最初に出ていますが、この流れのやり方は非常に良いのではないかと思います。基本構想というのは未来ビジョンが出ていますので、これから入って、あと都市経営の考え方は市民協働によるまちづくりが最初ですけども、一度、一般の方へボールを投げてみて、反応を見て、とにかく市民がそれを使わなければ絵に書いた餅になってしまうと思います。実際、災害では自治会なども出るのですが、自助、共助、公助というものがありまして、自助が7割、共助が2割、公助が1割だといわれます。実際最終的に動くのは行政ですが、やる気を起こすにはレベルをどこに置くかということはそれぞれ違うと思いますが、ボールを投げてみてやっていると、せっかく良いビジョンが元で基本計画を立てても、ものにはならないのではないかと思っています。極端かもしれませんが。

(根本学部長)

ありがとうございます。是非双方向のコミュニケーション、事務局案ができましたがこれでよろしいですかという話ではなくて、きちんとキャッチボールのできる運営を考えていければと思います。あといかがでしょうか。

(鈴木委員)

ここからが本当の会議になっていくのではないかと私は思っていました。今、私たちは農業と福祉を融合させて、ユニバーサル農業というキーワードで活動を始めたのですが、そうすると今までの行政の部署だともう連携し合わないに対応できないキーワードになっています。そうすると今作ってきた30年後のビジョンというのが新しいキーワードとして出て来ますので、そうすると当然その組織内をそれを達成するためにどういう組織であるべきかを一緒に考えていかなければいけないのではないかと思っています。例えばユニバーサル農業の話ですと、産業部の農業部署と障がいを持った人たちの部署それから企業関係ですよね、というのが当然会議の中に入らないと、というか、一緒に考える人たちがいないと成り立たないということがやってみて分かったので、同じテーブルに違う部署の人たち

を集められる機能がないと全然達成できませんので、今回この新しいキーワードを掲げた時に、どういう組織であるべきかを同時に考えないといけないと思います。30年後に一番必要になってくるのは例えば子育てといった時に、当然それを育てる親は会社、産業に関わっていたりするので、会社の制度も含めて男性も女性も子育てする時代になっているでしょうから、仕事、産業の部分も何らかの形で子育てに関わってくる体制になっていないとこのビジョンが達成できないのかなと思いますので、その組織的な部分も一緒に議論の中に入れてもらって、今までのような縦割りというような構造の中では達成できないのかなという意見というか感想をお伝えしたいと思います。

(根本学部長)

ありがとうございます。先ほどピラミッドと言ったのは良い面と悪い面がありまして、あまりシステムチックに制度的にやってしまうと、縦割りになってしまうと竜頭蛇尾というか、理念はカッコ良いのにやる仕事は前と変わらないじゃないか、となってしまうのはまずいですね。まだやり方は決めていないのですが、一つご提案ですが、今回まずビジョンのところはジャンルにとらわれずに12の未来ということをやってみたくです。それが今日資料にある経済産業とか、子育てとか安心安全とかとどういう関係にあるのかということをやると、おそらく1対1ではないと思います。マトリクスになっていくと思うのです。そうは言っても全ての組み合わせが全てあるわけじゃないですね。農業と教育、子育てとつながるとか、つながりの濃い部分がありますよね。ですからその部分が今後我々はいつも大きいテーブルを囲むばかりではなくて、これまでビジョンでやってきたようにワークショップのようにして、いくつかの関係性の強い部分を集中的に詰めていく、最後は部局ごとに書かざるを得なくなりますので、そこはある程度仕事の仕分けはしなきゃいけないと思うのですが、いきなり部があって課があってというところから始めるのではなくて、かたまりで議論をしていって、それが最後に割振りをするということになります。当然我々は提案として、この部局とこの部局はできれば一緒にやったらどうですかという提案の議論も妨げないということで良いかと思います。最終的に行政組織をどうするかということに我々は手を突っ込むことはできませんが、こうあった方がよいねと提案はできると思います。

(村田昌委員)

今根本先生がおっしゃっていただいたのですが、昨年の11月から1月にかけて意見交換会に参加させていただいて、あの時は各部署の方たちとお話しさせていただきました。そこで話した内容を今回のビジョンの中にも盛り込んでいただいて、本当にご苦勞をしてまとめていただいたなと思いましたけれど、これをもう一回来年度も、スケジュールを見ると5回目が5月にあって、6回目が7月にあって10月に7回目があって、3回この形があるだけになっているのですけども、何か双方向といわれている中で、どうしてもこの会議だと双方向になりにくいなと感じます。ですから来年度26年度においても、ああいった意見交換会があって、あの時は職員の方も参加していただきましたし、議員の方たちも声かけていただいたりしたのですけど、もっと、その時は本当に見ていただくだけだったのですけど、もうちょっと垣根を越えて議論ができると良いなと思います。議論というかお話を聞いてみたいというのもありましたので、そんな運営方法を考えていただけると良いと思いました。

(根本学部長)

他の皆さんも同じような考えをお持ちの方が多いのではないかと思います。予算のことがあるのでこの場で行政になり代わって「はい」という訳にはいかないのですが、このデザイン会議の思いとしては市の担当の職員の方とか、議員の皆さんとの意見交換のできるワークショップのようなものを次年度も是非お願いしたいということで事務局にも検討をお願いしたいと思います。

(山田委員)

未来ビジョンの方でも言おうとして言いそびれてしまったのですけれど、基本計画でも市民協働という言葉が載っていて、ただ市民協働の認知度が低いと考えていて、実際一般市民の方々に市民協働ってどういう意味か知っていますかと聞くと、はいと言われる方は少ないと思います。私自身も地域協働センターというところに見学に行った時に、東日本大震災で被災した子供たちに楽しい夏休みをとることを企画した学生がいたという話を聞いて、学生が企画したことに色んな企業がジュースやお弁当の寄付だったり、被災した子どもたちにもものづくり体験をさせてあげたり、そういったことが色々あって、被災した子どもたちがすごく良い経験をして帰るといふその実際があり、それが市民協働だよということを聞くまでは市民協働の意味が分かっていませんでした。市民協働の中では歯車というのがキーワードになっていて、学生とか企業とかNPOなどの歯車が一緒になって大きなことが成し遂げられるという意味だと私は受け取りました。いくら私のようなお金がなくて提供できるものがない小さい学生である歯車であっても、市民協働の一部となれば大きいものごとを成し遂げられるというようなイメージはおそらくこの市民協働という言葉からは中々伝わらないと思います。もう少し色々な場面で市民協働という言葉が出てくるのでそういった説明が必要かなと思いました。

(根本学部長)

ありがとうございました。最後でしたが、とても重要なお話だったと思います。まとめ方として、まだ例えばなのですが、事例、市民の皆さんが共感できるような具体的な事例ベースのシーンを付けるというか、そういうのを付けるというまとめ方もあると思います。細かくすればするほど全体像が見えなくなるので、例えばですけど12の未来というのを例えばこんなプロジェクト、子どもたちの教育の支援、さっき出たユニバーサル農業とか、いくつかの具体的なシーンを提示する、そういうまとめ方があると思いますので、研究の余地があると思います。そうしたら、最後にとっても重要なことが出たと思います。きれいに整理整頓してしまうとまたどの自治体でも同じじゃないかという総合計画になるのを一番恐れなければいけないわけで、そうではなくてそういうシーンが見える、そしてそこにはいろんな部局が噛んでいて、一つの部局が専業でやっているのではないということが伝われば手に取った市民の皆さんが、私の活躍の場がここにあるのだというのが見つかると思いますね。是非その辺も取り込んでいきたいと思います。ということでこういうことも含めて4月以降もまた皆さんと一緒にやっていきたいと思いますので、また忌憚のないご意見を頂戴できるようお願いしたいと思います。ではよろしければ進行を事務局にお戻しいたします。

## 6 閉会

(事務局)

根本学部長、ありがとうございました。委員の皆様も活発なご議論をありがとうございました。これをもちまして、第4回浜松市未来デザイン会



議を閉会します。なお、第5回は平成26年5月24日土曜日、午後2時から、会場は同じ全員協議会室にて開催しますので、ご案内します。それでは、お気をつけてお帰りください。